

学生インタビュー調査を始点とする IR活動について

Institutional Research
starting from Student Interview



上畠洋佑(金沢大学)

杉森公一(金沢大学)

河内真美(金沢大学)

目的と背景

■目的

- ①学生インタビューで得た生の声からRQを形成する。
- ②RQを明らかにするための教学IRの経過報告をする。

□背景

日本における教学IRの現状

教学データ(GPA等)、アンケート分析のみに終始
教職員の経験によるリサーチ・クエスチョン(RQ)形成

学生の生の声を抜きに形成したRQが
現実と大きく乖離する可能性が危惧される。

先行研究

鳥居(2015)

教学IRとは「学習・教授にかかわる人びととの対話を重視し、機関の現実的な課題にそくしたリサーチ・クエスチョンに基づきながら、教学IRの意義やそれにかかわる思考様式の重要性を内部質保証にかかわる人びとと共有していく地道な過程」

川那部ほか(2013)

学生実態調査の量的分析と、学生へのインタビューによって成長過程を探索する等の質的分析を組み合わせた手法を教学IRに取り入れた。

研究方法・用語

■研究方法

①学生インタビュー（半構造化インタビュー）

②教学データ分析

-金沢大学教務システムデータベースから「Tableau 9.1」を用いて学生データ抽出をした後、記述統計で分析を行った。

□用語

教学IR

学生に係る学内のデータを収集し、分析することを「教学IR」と定義する。

リサーチ・クエスチョン(RQ)

「教学IR」で明らかにしたい問いを「RQ」と定義する。

学生インタビューの概要

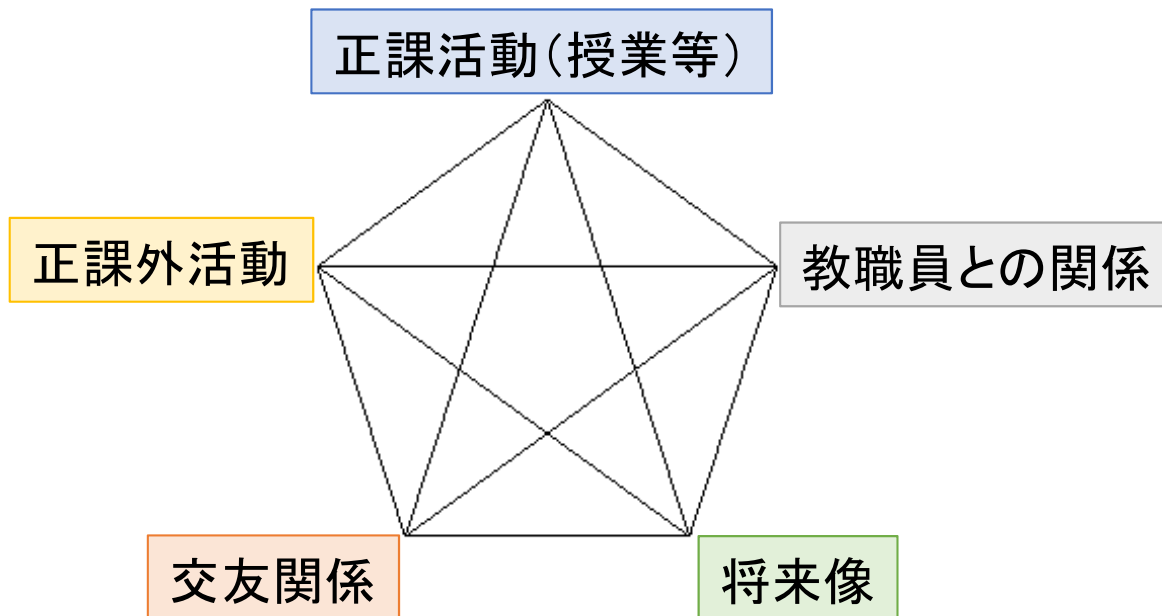
目的: RQを形成するために学生の声をきくこと
方法: 半構造化インタビュー
実施時期: 平成27年6~7月
対象: 金沢大学学士課程学生15名

対象学生の内訳(下表)

学年	性別	人間社会学域	理工学域	医薬保健学域
1年生	男性	1名	3名	
	女性	1名	1名	1名
2年生	男性	1名	1名	
	女性	1名		
3年生	男性	1名	2名	
	女性			
4年生	男性	2名		
	女性			

学生インタビュー手法について

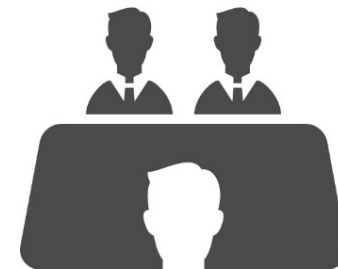
- ・5つの基本的なインタビューテーマを設定
「正課活動」「正課外活動」「交友関係」「将来像」「教職員との関係」
- ・「インタビュアー（登壇者）対 1名」と
「インタビュアー（登壇者）対 複数の学生」



1対1のインタビュー



1対複数のインタビュー



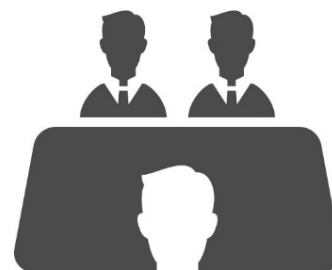
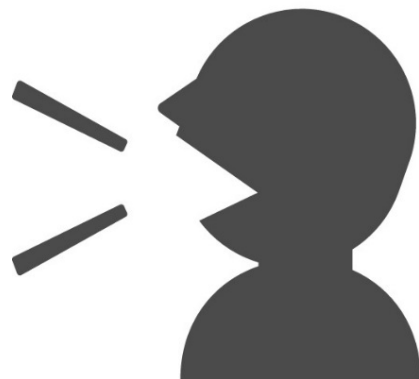
学生インタビューの狙い

・2つのインタビューの狙い



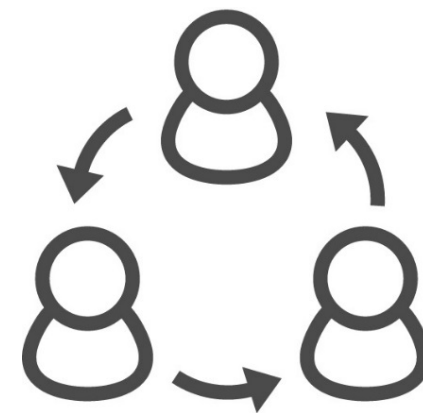
インタビュアー1名
×
学生1名

- ・信頼関係を築きやすく本音を聞き出すことができる。
- ・発言の意図やその思いを深掘りできる。



インタビュアー1名
×
学生複数名

- ・学生間に相互作用効果が生まれる。
- ・幅広く多様な意見が多く出てくるようになる。



学生インタビューの結果

・正課活動(授業等)の項目がインタビュー中の発言の大部分を占めた。

- ・単位の取得が簡単な「楽勝科目」が存在し、その情報は、部・サークル・寮の先輩・友人との情報交換で得ている。
- ・「楽勝科目」は「大人数」「大規模教室での授業」に多いと感じている。
- ・コース分けが、GPAによって決まる。そのため、「ビジネスライク」な単位習得傾向になり、学問的な興味があっても良い成績が取りにくい科目(非楽勝科目)は敬遠することが多い。
- ・競争が激しい学類もあれば、希望のコースにすんなり入れたり、弾力的に受け入れてくれるところもある。
- ・同じ科目でも担当教員により、評価が甘い場合と厳しい場合がある。授業が配当されることが運不運で決まる。

・競争が激しい学類もあれば、希望のコースにすんなり入れたり、弾力的に受け入れてくれるところもある。

正課活動(授業等)

・同じ科目でも担当教員により、評価が甘い場合と厳しい場合がある。授業が配当されることが運不運で決まる。

- ・アルバイトや部活・ボランティアサークルで忙しい
- ・寮が学生生活を支えてくれている。
- ・授業が終わってサークルの集まりがないとすぐに自宅に帰る。

正課外活動

- ・困った時は友達を頼る。
- ・金沢出身だからすぐに入学前から友達がいた。
- ・新入生歓迎イベントを欠席したりすると自分が所属する学類内で友達ができない。

交友関係

教職員との関係

- ・教員と接する機会が少ない
- ・窓口対応への要望

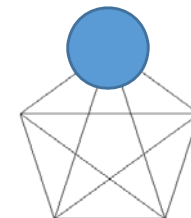
将来像

- ・学外の大学院に進学したい。
- ・就職のイメージが湧かない。
- ・なんとなく研究者になりたい。
- ・自分が学んでいることが将来役に立つのか不安を感じる。

RQの形成過程

- ・インタビューの大部分を占めた「正課活動」に係る発言に注目した。

正課活動(授業等)



同じ科目でも担当教員により、評価が甘い場合と厳しい場合がある！



「楽勝科目」は「大人数」「大規模教室での授業」に多い！

コース選抜の競争が激しいところもあれば、すんなり入れたり、弾力的に受け入れてくれるところもある。

とりあえず単位を取れて卒業できればいいです。

希望のコースに行くために「楽勝科目」を取っている！

「楽勝単位」の存在は本当？
教学データ分析で検証しなければ。

希望コースに行きたいために「楽勝単位」を取る学生もいれば、卒業だけすればいい学生もいる。

成績を見るだけではわからない。学生の成績と合わせて「履修履歴」を分析していく必要があるのではないかと？

RQ:「学生はどのような履修履歴を歩んでいるのか？」

RQに基づく教学IR計画

RQ:「学生はどのような履修履歴を歩んでいるのか？」

本研究の教学IR範囲

教学データ分析の壁

- ・「楽勝科目」の「楽勝」はどのような意味？
- ・教務システム運用の複雑さにより分析が難解

ケース履修履歴ヒアリング

履修履歴・成績について
詳細にヒアリングを実施



ヒアリングする学生の許可の上、
履修履歴・成績を抽出



教務システムデータベース
(教務SDB)

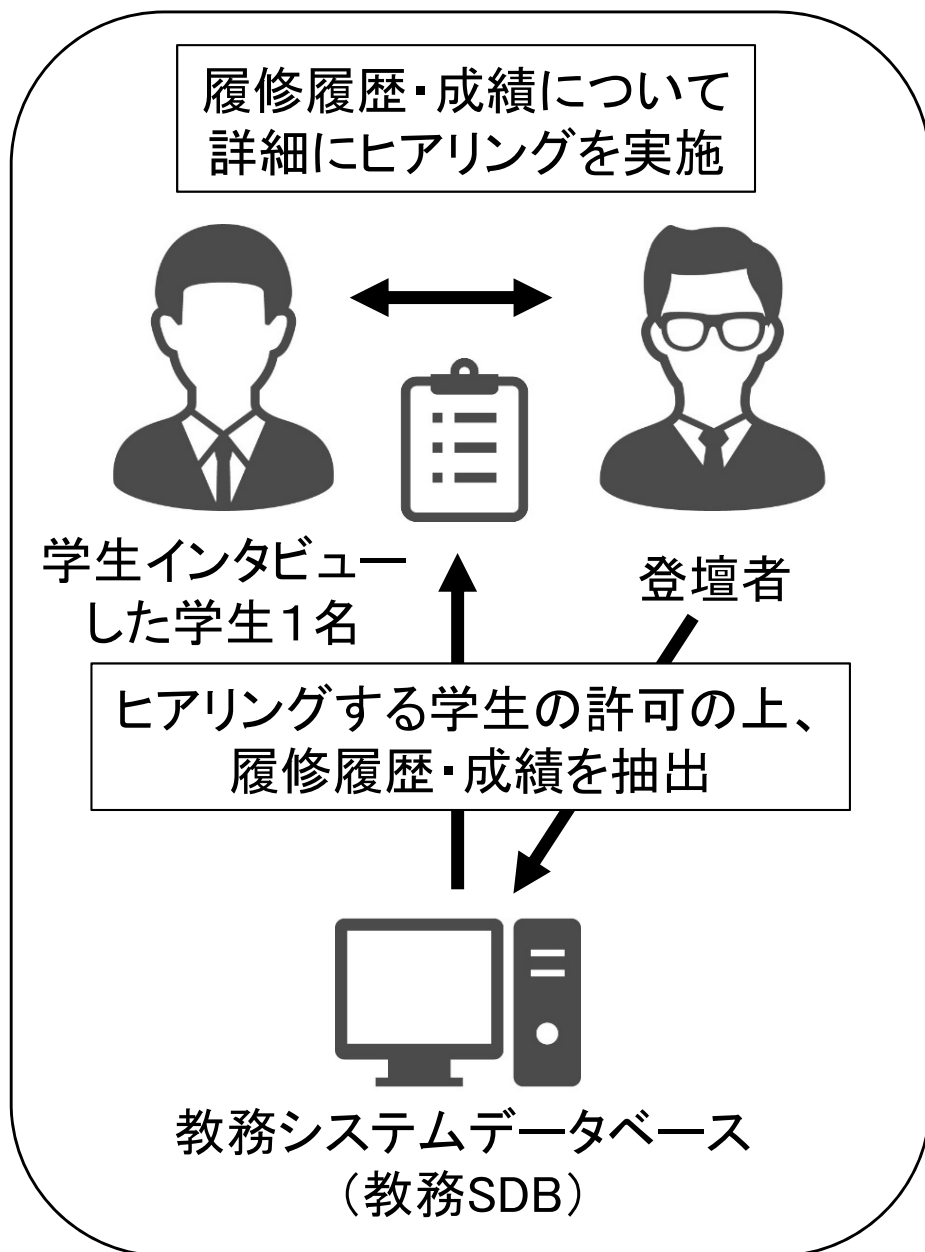
成績データと履修履歴の分析

- ・「楽勝科目」の存在有無・指標の検証
- ・同一科目間での教員の評価の差の検証 等
- ・コース選抜前後の履修行動変化の分析
- ・履修行動の類型化

教学マネジメント改革の支援

- ・コース選考基準やカリキュラム編成の検討資料として教学IRの結果を利用

本研究の教学IR①



■ ケース履修履歴ヒアリング

「教学データ分析の壁」克服を目的に試行的実施

対象：学生インタビューした15名の中の4年生1名

方法：対象学生の履修履歴・成績データを用いて
登壇者が対象学生に1科目ずつその内容や履修
した理由や受講後の感想などをヒアリングした。

【結果】

- ・自己判断による「楽勝科目」は63科目中4科目。
- ・1年次の「楽勝科目」は、友人等から聞いた
「**楽に、良い成績で単位が取れる科目**」
- ・3年次の「楽勝科目」は、「1年次とは異なり、既修
専門科目での知識を活かして単位取得がほぼ確
実に見込める科目。**卒業のために必要な単位数
を確保できれば良いので良い成績かは問わない**」



1事例の結果であるが、教学データを用いて、
「成績データと履修履歴分析」を試行的に実施し、
ヒアリング結果について分析する。

本研究の教学IR②

ポスターをご覧願います。

結論

■ 結論

- ① 学生インタビューにより「RQ: 学生はどのような履修履歴を歩んでいるのか？」を形成できた。
- ② 「RQ: 学生はどのような履修履歴を歩んでいるのか？」を明らかにする上で、「教学データ分析の壁」が存在した。これを克服するために「ケース履修履歴ヒアリング」を実施し、「楽勝科目」の「楽勝」の意味が複数あることが示唆された。このヒアリング結果を検証するために、学生が自己認識する「楽勝科目」と「低成績科目群」との成績分布を分析した結果「楽勝科目」が存在することと、「楽勝科目」における「楽勝」の意味の違いがあることがいえそうである。これにより、「ケース履修履歴ヒアリング」は「教学データ分析の壁」の一部を克服するきっかけになることがわかった。

考察と今後の課題

■考察

1. RQ形成の3類型化(「考察:RQ形成の3類型参照」)
2. インタビューを起点としたIR実施によるIRerの意識変容
“集団”としての学生から“個人”としての学生
3. ケース履修ヒアリングのキャリア形成支援効果
大学在学中の学修履歴の振り返りが行うことができる
4. 2種類の学生インタビュー効果

□今後の課題

1. 複数人のケース履修ヒアリング実施が必要。
2. 履修要件の複雑さを整理し、成績データと履修履歴の分析を実施、教学マネジメント改革支援に繋げる。

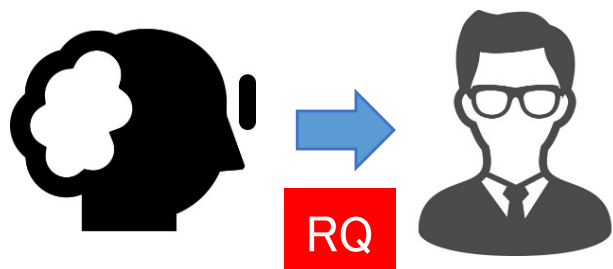
考察：RQ形成の3類型

関与度(低)

学生関与度

関与度(高)

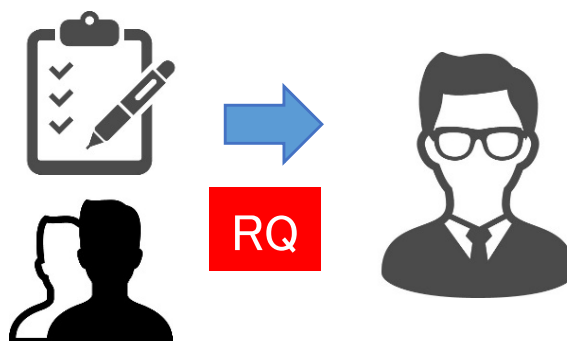
執行部RQ形成型



岩崎(2014): 関東学院大学

大学執行部が認識している自大学の経営課題解決を目的としたRQを形成する類型。

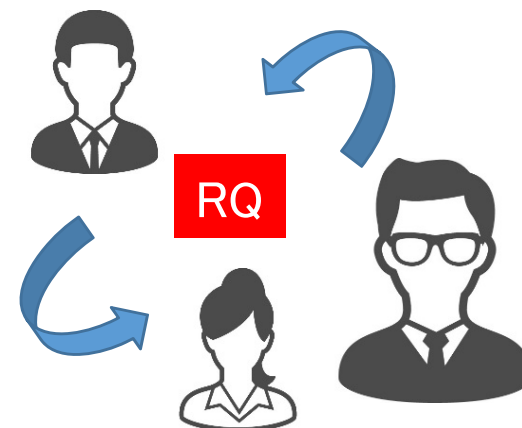
教職員RQ形成型



川那部ほか(2013)

学生アンケート結果や、日々学生と接する教職員の経験則からRQを形成する類型。

学生RQ形成型



本研究: 金沢大学

学生インタビューから聴取した学生の生の声からRQを形成する類型。

参考文献

小林雅之ほか(2014)「日本型IR構築に向けて」
『カレッジマネジメント』No.189、pp.6-13

鳥居朋子(2015)「立命館大学における教学IRの開発の現状と展望
— IR プロジェクトの歩みとリサーチ・クエスチョンを通して—」
『立命館高等教育研究』 第15号、pp.37-53

川那部隆司ほか(2013)「教学IR における学生調査の手法開発
—量的アプローチと質的アプローチを併用した学業成績変化過程
の検討—」『立命館高等教育研究』第13号、pp.61-74

岩崎保道(2014)「日本型大学 IR の現状—組織形態に注目して—」
『関西大学高等教育研究』(5)、pp.49-54